

「惟有愛詩心未已、東歸與續棣華篇」

——北宋詩人・王安石と妹

水 津 有 理

北宋の詩人・王安石（1021-1086、字・介甫）には二人の異母兄の他、四人の弟と三人の妹がいたことが知られている。父・王益ははじめ徐氏と結婚して安仁・安道の二子をもうけ、徐氏の死後、撫州金谿の呉氏とのあいだに、安石・安国・安世・安礼・安上の五子、そして張奎（?-1075）に嫁いだ王文淑（1025-1080、長安県君）、朱明之（生卒年不詳、字・昌叔）に嫁いだ二女、また沈季長（1027-1087、字・道原）と結婚した三女（?-1088、徳安県君）ら三人の娘を得た。

王家の女性たちが詩才に恵まれていたことは当時から知られていたが、王安石の集には詩題にこれら妹たちの名がみえるものが十三首残されている¹。また、それらは全て既婚の妹、もしくは嫁ぐ妹に寄せた作品である。本論考はこれらの作品を中心に、王安石の文学と妹について考えてみたい。

次に引く「朱氏の妹に寄す（寄朱氏妹）」（『李壁注』巻8）は、嘉祐三年（1058）、王安石が二番目の妹に宛てて書いたものである。この年、王安石の母・呉氏の六十歳を寿ぐため、散り散りになっていた家族が一堂に会する機会があった²。再会の喜び、そして別れの悲しみが描かれたこの五言古詩には、二番目の妹の夫「朱子」との出会い、そして当時すでに嫁いで遠い場所にいた長妹の夫「張倩」（「倩」は男子の名にそえる美称）のこと、また婚約前であった三番目の妹の夫「沈君」の名などがみえる。

昔來高郵居	我始得朱子	昔來高郵に居りしとき、我始めて朱子を得たり
從容談笑間	已足見奇偉	從容たる談笑の間、已に奇偉を見るに足る
行尋城陰田	坐釣渠下沚	行きて尋ぬ 城陰の田、坐して釣る 渠下の沚
歸來同食眠	左右皆圖史	歸り来たりて食と眠とを共にすれば、左右皆 図史なり
入視爾諸幼	歡言亦多祉	入りて視る 爾が諸幼、歡言 亦た 祉 多し
當時獨張倩	遠在廬山趾	当時 独り張倩、遠く廬山の趾に在り
沈君未言昏	名已習吾耳	沈君 未だ婚を言わざるも、名は已に吾が耳に習う
安知十年來	乖隔非願始	安ぞ知らん 十年來、乖隔するは願始に非ず
相逢輒念遠	悲吒多於喜	相い逢えば輒ち遠きを念い、悲吒 喜びより多し
今茲豈人力	所念皆聚此	今 茲にあるは豈に人力ならんや、念う所 皆 此に聚まる
諸甥昔未有	滿眼秀而美	諸甥 昔 未だ有らず、眼に満つるは秀また美なり
低回吾親側	亦足慰勞止	吾が親の側を低回するは、亦た勞止を慰むるに足る
嗟予迫時恩	一傳日千里	嗟 予 時の恩に迫られ、一たび伝あらば日に千里
爾舟亦已戒	五兩翻然起	爾が舟 亦た已に戒い、五兩 翻然として起つ
蕭蕭東南縣	望爾何時已	蕭蕭たり 東南の県、爾を望むこと何れの時か已まん
空知夢爲魚	逆上西江水	空しく知る 夢に魚と為りて、逆に西江の水を上るを

一首は王安石と朱明之の出会いから始まる。二人がはじめて会ったのは、この詩が書かれた当時から遡

ること七年、皇祐三年（1051）、南北交通の要所・高郵の地でのことだった。朱明之は曾鞏の継母の従弟であり、また異母兄・安仁の同年でもある。くつろいだ談笑のあいだにも、その非凡な才がみてとれ（「從容談笑間、已足見奇偉」）、二人はともに散策や釣りに出かけて愉快的時間を過ごす（「行尋城陰田、坐釣渠下沚」）。外出から帰って寝食を共にし、ふと見渡すと書齋は書物だらけ（「歸來同食眠、左右皆圖史」）、家族の団欒にまじって年少者に囲まれるのもまた幸せなひと時だった（「入視爾諸幼、歡言亦多祉」）。このとき王安石は三十一歳。やがて妹の夫になる相手との穏やかな日常が、幸福な追想に包まれて描かれている。このとき、一番上の妹は嫁いでいたが、下の二人はまだそばにいたのだろう。その後十年も一堂に会する機会がないとは当初は思いもしないことだった。久々の家族の再会、妹らの子に囲まれた幸福な時間はしかし、長続きするものではない。いま、君を乗せる船は出航の準備がととのい、五両の吹き流しは追い風を告げている（「爾舟亦已成、五兩翻然起」）。詩の最後は「朱氏の妹」が去ってゆく場所との距離を思い、この別離の悲しみが終わるのはいつかと嘆き、かなうなら魚になって水を遡り、追いかけていきたい（「蕭蕭東南縣、望爾何時已。空知夢爲魚、逆上西江水」）と結ばれる。「夢に魚と爲る」について李壁注は夢と現実の混淆を述べた『莊子』大宗師篇の「汝は夢に蝶と鳥と爲りて天に厲り、夢に魚と爲りて淵に没る」³を引く。若き日の出会い、別離の長さを思わずに過ぎた日々、心をなぐさめるひと時の団欒から再びの離別まで一気呵成に綴られ、結びの率直な感情表白が印象的な作品である。

もう一首、やはり二番目の妹に宛てた作品「舒州より朱氏女弟を追送す。木瘤僧舎に宿り、明日長安嶺を度り皖口に至る（自舒州追送朱氏女弟宿木瘤僧舎明日度長安嶺至皖口⁴）」（巻18）をみてみたい。高郵での朱明之との出会いの翌年、皇祐四年（1052）の作である。前年、王安石は通判として舒州に赴任。妹夫妻はおそらく朱明之の赴任の途中、舒州に立ち寄りしばらく滞在したと思われる。朱明之の「憶^{むかし}昨^{しんろう} 潜樓に幸いにして久しく留まり、乾坤の談罷みて睢鳩を論ずるを」（「因憶瀟樓讀書之樂呈介甫」、『全宋詩』巻708⁵）の詩句は、この当時を詠ったものである。朱明之は舒州滞在中、王安石と天柱山（「潜樓」）に登り、天下を語り、『易経』『詩経』を論じ合って共に時を過ごした。次の作品はその滞在中を終えて去ってゆく二人を詩人が途中まで追送し、二人の行く手を思って詠んだもの。詩題に付された清・沈欽韓の注によると「長安嶺は（舒州）懷寧県の西三十里に在り、甚だ高く且つ長し、路は潜山県皖口鎮に通ず。（皖口鎮は）懷寧県の西十五里、皖水の江に入る口なり」とある。季節は冬、明日になれば二人は長く険しい雪の峰を越えてゆく。そして皖口からおそらく長江を経て夫の赴任地に向かうのであろう。

晨霜踐河梁	落日憩亭皋	晨霜 河梁を踏み、落日 亭皋に憩う
念彼千里行	惻惻我心勞	彼の千里の行を念い、惻惻として我が心 ^{うれ} 勞う
攬轡上層岡	下臨百仞濠	轡を攬りて層岡に登り、下は百仞の濠を臨む
寒流咽欲絕	魚鼈久已逃	寒流 咽として絶えんと欲し、魚鼈 久しく已に逃る
暮行苦遭迴	細路隱蓬蒿	暮行 甚だ遭迴、細路 蓬蒿に隠る
驚麕出馬前	鳥駭亡其曹	驚麕 馬前に出で、鳥は駭 ^{きようきん} きて其の曹を亡 ^{おどろ} う
投僧避夜雨	古檠昏無膏	僧に投じて夜雨を避くるも、古檠 昏に膏 ^{こけい} 無し
山木鳴四壁	疑身在波濤	山木 四壁に鳴れば、身は波濤に在るか ^た と疑う
平明長安嶺	飛雪忽滿袍	平明 長安の嶺、飛雪 忽として袍に満たん
天低浮雲深	更覺所向高	天低れて浮雲は深し、更に覺ゆ 向かうところの高きを

詩は霜の降りた早朝の出立からはじまる。橋は土地の境界を隔てる旅立ちの地点にかかるものだろうか。橋を渡れば追送の一行と別れ、いよいよ旅立ちである。「晨霜 河梁を踏み、落日 亭皋に憩う」という詠い出しは、『文選』の行旅詩を思わせる。例えば「筓に^{よる}済る^{わた}漁浦の潭、旦に及ぶ^{ふち}富春の郭」（謝靈運「富

春渚」、『文選』巻26)、「昨夜 南陵に宿り、今日 蘆洲に入る」(鮑照「還都道中作」、同巻27) などである⁶。また、第三・四句目は謝靈運の「人の千里を行くを懐い、我が勞 十句に盈つ(懐人行千里、我勞盈十句)」(「答謝惠運」、『芸文類聚』巻29 人部「別・上」)を踏まえたものかも知れない。

「轡を攬りて層岡に登り」から「身は波濤に在るか疑う」までの十二句は、行路の厳しさをいう叙景と、若き夫婦の遠路を思う詩人のころの有り様が重なり合う。叙景は詩人の想像であろうか。「逶迤」は前に進むことが容易でないさまをいうことば。人も通わぬ山路の様子をいう第十一・十二句の「鳥は駭きて其の曹を亡う」は、『楚辭』「招隱士」で山中の劍呑さを描いた箇所「禽獸は駭きて其の曹を亡う」をほとんどそのまま踏襲する。また粗末な僧舎で、暗闇のなか吹き付ける風雨の音を聞き「波にもてあそばされる小舟のよう」と述べた第十六句に、李壁注は唐・韓愈が月のない闇夜、独り僧舎に宿り、夜風に鳴る樹々の音に驚いていった「猶お疑う波濤に在るか、怵 惕 夢に魔と成る」(「陪杜侍御遊湘西兩寺獨宿有題一首因獻楊常侍」、『全唐詩』巻337)を引いている。

最後の二句「天低れて浮雲は深し、更に覚ゆ 向かう所の高きを」について、李壁は「此の如き十字は亦た得難し」と評している。「天」と「雲」また「低」「深」「高」、いずれもごくありきたりな語であるが、「雲の彼方に去る人への思い」をいうものとしては、たとえば中唐の詩僧・無可に「白雲深處去、知宿在何峰」(「送僧」、同巻814)などがある。「更覚」は王安石がしばしば用いたことば。結びの用例としては「荒城回首山川隔、更覺秋風白髮生」(「曾子固」、巻36)などがあり、ふいに、しかし身を切るような切実さをもって感じる「瞬間の思い」の表出に用いられる点に特徴がある。深い雲のなかに消えてゆく二人の姿を胸に浮かべれば、それがあたかも終わりのない旅のように思われ、ふいに、一層胸が苦しくなるのである。

次にやや趣の異なる作品をみてみよう。やはり家族との別れを詠んだ「虔州・江陰の二妹に寄す(寄虔州江陰二妹)」(巻20)。詩題の「虔州」の妹は長妹・文淑を、「江陰」の妹は次妹を指す。「朱子の妹に寄す」と同時期、母のために集まった妹たちが再び去って行くときのものである。

貢水日夜下 下與章水期	貢水 日夜下り、下は章水と期す
我行二水間 無日不爾思	我 二水の間を行き、日として爾を思わざる無し
飄若越鳥北 心常在南枝	飄たるは越鳥の北にありて、心は常に南枝に在るが若く
又如岐首蛇 南北兩欲馳	又た岐首の蛇の、南北 両つながら馳せんと欲するが如し
逝者日已遠 百憂詎能追	逝く者は日に已に遠ければ、百たび憂うも詎ぞ能く追わん
生存乖乖隔 邂逅亦何時	生存 乖隔に苦しむ、邂逅 亦た何れの時ぞ
女子歸有道 善懷見於詩	女子 帰げば道有り、懐うこと善きは『詩』に見わる
庶云留汝車 慰我堂上慈	庶いて云わん、汝が車を留めて我が堂上の慈を慰めんと

この作品が先の二首と異なるのは、具体的な家族の情景が詠われず、『詩経』と「古詩十九首」(『文選』巻29)を下敷きに、終始感情表白にことばが費やされることである。『詩経』からは「載ち馳せ載ち駆り」(さあ、馬車を駆り立てて)と始まる鄘風「載馳」、また「恣かなる彼の泉の水も、亦た淇のかわに流ぐなり。衛を懐うこと有りて、日として思わざるは靡し」とうたい出される鄘風「泉水」。前者は遠国・許に嫁いだ穆夫人の作とされ、後者は衛から嫁いだ姫君が里帰りを果たせず嘆くうたとされる⁷。「古詩十九首」からは旅に出た男と残された女がその別離をうたう其一「行き行きて重ねて行き行く(行行重行行)」。本作の形式・句数・全体に散在する表現の多くがこれと重なるかたちで書かれている。

最初の四句は、先に挙げた『詩経』「泉水」の冒頭を踏まえていよう。一句目「貢水」、二句目「章水」はともに川の名。福建省長汀県を源とする貢水は、江西省贛県の北で章水と交わって贛江となり、さらに北上して中国最大の淡水湖・鄱陽湖に注ぐ。地図でみると貢水と章水が一つに交わるのはちょうど文淑の

夫の赴任地・虔州のあたり。そして二つの流れが一つになってやがて湖に注ぐ贛江は、王安石の原籍地を含む一帯を南北に貫く江西省最大の川である。王安石はこのときまで、揚州・鄞県・舒州・常州などの各地を転任してきた。小さな泉が末は川に注ぐように、二つの川がやがて一つになるように人には帰るべき場所があるもの。一方私は、ふるさとを思い、妹たちを思いながら、各地を転々とする宦遊のなかにある。この四句は詩人にかかわる具体的な地名を織り込みつつも、うたい起こしの「興」の機能を果たし、また一首を、水の流れるように尽きることのない別離の悲しみに染めているかにみえる。

後に続く八句は、ほぼ「行行重行行」の翻案といってよい。第十一・十二句「生存苦乖隔、邂逅亦何時」は「行行重行行、與君生別離…道路阻且長、會面安可知」（傍点部分）と、「飄若越鳥北、心常在南枝」は「胡馬依北風、越鳥巢南枝」（傍点部分）、「逝者日已遠」は「相去日已遠」と重なる。南北に引き裂かれる双頭の蛇をいった第七・八句もまた「胡馬」「越鳥」の変奏といってよいだろう。

最後の四句は、先に挙げた『詩経』『載馳』の「女子は懐うところ善きも、亦た各おの行有り（女子善懐、亦各有行）」、また「泉水」「女子には行有りて、父母兄弟より遠ざかる（女子有行、遠父母兄弟）」を踏まえる。女子は嫁げば肉親から遠ざかるもの、それは古より変わることのない理である。そうであるからこそ「しばしその去り行く車を留めて残される母を慰めてほしい」と一首は終わる。馬車を駆ってゆく女性のイメージにも、馬車で故郷にはせ参じようとうたう「載馳」が揺曳する。

注釈者の李壁はこの詩に「此の詩を読まば、公の友愛に於いて最も隆きを知らん」という評を書き添えている。当時の官僚はほぼ三年ごとに転任を繰り返した。王安石も、また、士大夫の家庭に育ち、同様の家に嫁した妹たちにとっても、一たび命が下れば、慣れ親しんだ場所を去って任地に向かうことは、日常茶飯のことであっただろう。王安石の「妹」詩が既婚の妹に寄せたものであったこと、またその主たる内容が別離の悲しみ、別離と再会をめぐる家族の情景であったこともこのことによる。

このような「妹」詩の系譜は中国の古典文学のなかに存在するのだろうか。兄が妹に書き送った作品という意味でまず挙げられるのは晋・左思の四言詩「離を悼んで妹に贈る二首（悼離贈妹二首）」（『芸文類聚』巻29、人部「別・上」）、そして南朝・宋・鮑照の「大雷岸に登り妹に与うる書（登大雷岸與妹書）」（『鮑明遠集』巻9）である。二人はともに寒門出身として知られ、そしてともに、詩人として名を残した妹がいた。名を左棻、鮑令暉という⁸。

寒門の士として任官をほとんどあきらめていた左思は、泰始八年（272）、妹が武帝（司馬炎）の女官として宮中にのぼったことを契機に洛陽に居を移し、「三都賦」を完成させたといわれる。「悼離贈妹」詩は、その妹との別れを詠った作品である。

……

峨峨令妹 應期挺生 峨峨たる令妹は、期に応じて生に挺ず^{ぬきん}
如蘭之秀 如芝之榮 蘭の秀が如く、芝の榮が如し

……

幽思泉湧 乃詩乃賦 幽思は泉のごとく湧き、乃ち詩となり乃ち賦となる
飛翰雲浮 擿藻星布 翰を飛ばせば雲の浮かぶがごとく、藻を擿げば星布^{しほろ}ぐるがごとし
光曜邦族 名馳時路 光は邦族に曜き、名は時路に馳す
翼翼群媛 是瞻是慕 翼翼たる群媛は、是れ瞻^み 是れ慕う

左棻は、その容色ではなく、文章の才によって宮中に入った。詩人はまずその妹の類まれな才能を言祝ぎつつ「惟れ我 惟れ妹 寔に惟れ同生。早に先妣を喪えば、恩は常情に百たびす。女子には行有りて、

まこと
 実に父兄より遠ざかれど、骨肉の思 固より歸りて寧みまう有り」、[京宇を同じくすると雖も、殊邈なるは異国のごとし。越鳥は南に巢くい、胡馬は北を仰ぐ。自ら然るの恋、禽獸かわと革なる罔し]と別離の悲しみをいう。早くに母を亡くし強い絆で結ばれた兄妹は、いまや同じ京師かにありながら会うこともかなわない。状況は異なるものの、『詩経』の語句、「古詩十九首」のことはそのまま王安石の詩に引き継がれているのが見てとれる。

この作品から百五十年ほどを隔てて書かれたのが、元嘉十二年（435）の作「大雷岸に登り妹に与うる書」である。鮑照はかつて宋の孝武帝（劉駿）に妹について問われ、「私の才能は左思には及ばないが、妹の才能は左棻のそれに次ぐものがある」（梁・鍾嶸『詩品』下品「〔鮑〕照嘗て孝武に答えて云えらく、『臣の妹の才は自ずから左芬（＝左棻）に垂ぐも、臣の才は（左）太冲に及ばざるのみ』）として自身らを左思兄妹に擬え、妹の詩才を高く評価したことが伝えられている。この作品は、彼がはじめてふるさとを離れて任地に向かう途上、大雷岸（現在の安徽省望江県付近）で目にした山水の眺望や夕景に沈みゆく風物などを、自らの心境と合わせて妹に書き送った書簡である⁹。冒頭には「吾 寒雨に発せしより、全行日少なし。加えて秋潦の浩汗として、山溪あつまの猥くり至り、渡沂 無辺にして、險径 遊歴す。棧石 星に飯い、荷を結びて水に宿る。旅客は貧辛にして波路は壯闊なり。……嚴霜 慘節、悲風 肌を断つしん。親を去りて客となるを、如何とす、如何とす」と、長雨の晩秋を行く旅路の長さ辛さ、客地にある心情の表白があり、また結びには「寒暑かな 適みい難し、汝 専ら自ら慎むべし。夙夜 戒護し、我を念うを為す勿れ。之を知らんと欲するを恐れ、聊か睹る所を書す」とふるさとに残る妹を気遣うことばが綴られている。南宋・劉克莊の「哀仲妹」（『全宋詩』巻3056）には「弟は雪中 汝が句に聯ねるを憶い、兄は雷岸を行きて家書を寄す」の詩句がある。「雪中に句を聯ねる」はいわゆる「詠絮の才」として広く知られた逸話。晋の謝安が雪の日に一族の子供たちと文学を論じ「白雪の降りしきるさまは何に似るか」と問うたところ、兄の息子が「空中に塩を撒いたものに似ています（撒鹽空中差可擬）」と答えたのに対し、もう一人の兄の娘（謝道韞）が「柳のわた毛が風に舞う、というほうがよいですわ（未若柳絮因風起）」と句を継ぎ機智をみせたもの（『世説新語』言語）。「雷岸を行きて家書を寄す」は、言うまでもなく鮑照の作品を踏まえたものである。この対句からは、この二つのエピソードが兄妹あるいは弟姉をめぐる文学の佳話として、また才たけた女性をいう典型として継承されていたことが見てとれる。

この二作品に次いで、兄から妹へと詠われたのが、杜甫の「元日 韋氏の妹に寄す（元日寄韋氏妹）」（『全唐詩』巻224）である。

近聞韋氏妹	迎在漢鍾離	近ごろ聞く韋氏の妹、迎えられて漢の鍾離に在り
郎伯殊方鎮	京華舊國移	郎伯は殊方に鎮し、京華は旧国より移る
秦城回北斗	郢樹發南枝	秦城 北斗を回らせ、郢樹 南枝を発く
不見朝正使	啼痕滿面垂	朝正の使を見ず、啼痕 満面に垂る

「春望」と同じ至徳二載（757）の元日に書かれたこの五言律詩は、詩人が反乱軍の占拠する長安から妹に寄せた詩である。杜甫の妹はこの時すでに夫を亡くし、幼い遺児とともに夫の長兄（郎伯¹⁰）の庇護のもと鍾離（漢代の地名、楚に属する）に引き取られていた。長安は陥落し、都は他所に移っている。北斗がめぐって長安に春が訪れ、鍾離（「郢」は楚の国都）で南向きの枝に花が咲く頃になっても、宮中で初春を祝う使者に見えることはない。後半二句は、寄る辺ない妹の身の上と、同じように先の見通せない自らの境遇を重ねていったものにみえる。

唐代には他にも白居易の「除夜 弟妹に寄す」（『全唐詩』巻436）など、年少の兄弟を思った作品があるが、興味深いのは王維の「弟妹に別る二首」其一（同巻125、巻122に盧象の作として重収）である¹¹。

兩妹日成長 雙鬢將及人	両妹日び成長し、双鬢將に人に及ばんとす
已能持寶瑟 自解掩羅巾	已に能く宝瑟を持ち、自ら羅巾を掩うを解くす
念昔別時小 未知疏與親	念う 昔 別時 小く、未だ疏と親を知らず
今來始離恨 拭淚方慙慙	今來始めて離恨、涙を拭いて方に慙慙

幼い妹の髪が伸びて、自分で瑟を抱え持ち、絹の布で上手に包めるようになった。昔は振る舞いも知らなかったけれど、いまはじめて肉親との別れの悲しみを知り、涙を拭いて心をこめて挨拶をする。この作品は妹を描いているが、その妹はこれまでみたような既婚の、もしくは成人の妹とは違い、むしろ「子ども」を描いた作品の一つと言うべきかも知れない。幼女が離別の悲しみを知り娘となってゆく短い季節をとらえた兄の視線には、年長者としてのやや父性的な心情が漂い、外見や所作の変化など具体的な描写に特徴がある。「兄から妹へ」という形で書かれたものに、哀傷文学として墓誌銘や祭文があり、六朝では左思と同時代の潘岳に「陽城劉氏妹哀辞」が、また陶淵明に「祭程氏妹文」がある他、唐代では弟から姉に書かれたものとして、柳宗元「亡姊崔氏夫人墓誌蓋石文」（『全唐文』巻591）、李商隱「祭裴氏姊文」、「祭徐氏姊文」（ともに同巻782）などを挙げることができる。なかでも柳宗元は「嫁して後は夫に敵わないが、成人前、幼少期のことならば自分のほうがよく知っている」と述べ、姉が幼いころから聡明で、一族の年長者たちの名を呼び間違えたこともなく、また子供らで遊んでいたときにおもちゃの取り合いをしたこともないなど具体的なエピソードを書き連ねている。成人後は妻・母といった社会的役割を生きて行く女性たちの「未だ疏と親を知らない」幼少期・少女期は、より個別的具体的なエピソードのなかで記憶され、叙述の対象として魅力的であったということだろうか。

北宋時代の「妹」詩の書き手として、王安石以外に挙げておきたいのが黄庭堅である。彼には四人の妹がおり、長妹は洪民師に、次妹は陳槩に、また他の二人は王純亮、張埴にそれぞれ嫁いでいる¹²。次に挙げるのは二番目の妹に贈った六十句からなる五言古詩「陳氏の妹と別るるに寄す（寄別陳氏妹）」（『山谷集』外集巻11）の一節、熙寧四年（1071）、黄庭堅二十七歳の作である。

……

戮力事耦耕 甘貧至同穴	力を戮せて耦耕を事とし、貧に甘んじて同穴に至る
彼於視三公 其猶吹一吷	彼れ三公と視ぶるに於いては、其れ猶お一吷を吹くがごときも
雍容二南間 此婦真豪傑	雍容たり 二南の間、此の婦 真に豪傑たり
男兒何有哉 今壯而善蓋	男兒 何をか有らんや、今壯なるも善く蓋い
逢時秉鈞軸 邂逅把旄鉞	時に逢いて鈞軸を乗り、邂逅して旄鉞を把るも
富貴多禍憂 朋黨相媒孽	富貴は禍憂多く、朋黨は相い媒孽す

……

善懷詩所歌 行矣勿惜別	懐うこと善きは『詩』の歌うところ、行け 惜別すること勿かれ
皇皇太史筆 期汝書英烈	皇皇たる太史の筆、汝が英烈を書すを期す

力をあわせて田畑を耕し、貧窮にも手を取り合って一つの墓に入る。そのような女子の生きざまは、位大臣を極めることと比べれば吹けば飛ぶようなものかもしれないが、実はそれを全うすることこそ「豪傑」である。これに比べれば男子など、たまさか天下国家の仕事を担うことがあっても（「逢時秉鈞軸、邂逅把旄鉞」）、あっという間に老い、その人生はさまざまな陥穽に満ちている（「富貴多禍憂、朋黨相媒孽」）。さあ行きなさい、やがては堂々たる歴史家の筆でそなたの功績が記されることを、兄は信じているから。この作品は先にみた王安石詩と同じく離別を詠ったものではあるが、特徴的なのは、別れゆく妹にいわば「女子の本懐」を説くことである。「男の人生などつまらぬものだ」とでもいいかげなこれらのことばは、

妹へのはなむけという体裁を借りつつ、若き黄庭堅自身の人生への感慨を述べたものともいえるだろう。

ここまで簡単ではあるが王安石とほぼ同時代までの「兄から妹へ」というかたちで書かれた作品をみてきた。それは左思の「悼離贈妹」を嚆矢とし、六朝以後は長い中断を経て杜甫に書き継がれ、王安石・黄庭堅に続いている。主題は別離の悲しみであるが、その別れは女子が『詩経』の昔から定めとして負った必然の別れである。北宋以降はとりわけ、夫の転任について各地を点々とする生活がその漂泊感を深くする。

先行研究によれば、士大夫を主たる担い手とする中国の古典文学のなかで、妻や母、娘といった「家の中の女たち」がその題材として積極的に取り上げられるようになったのは、中唐以降のことであるという。中原健二氏は潘岳の「悼亡詩」を嚆矢とする妻を悼む詩が、中唐を境にさかんに制作されるようになり、宋以降はそれがより率直な心情表白や具体的描写を志向するようになったと指摘する¹³。「妹」詩の流れも全体的にはこれと一致するように思うが、独立した系譜が存在するというには作品の数に乏しく、さまざまに描かれるようになった士大夫の家族の詩の一部とみるべきであろう。その点からみると、王安石の十三首がやはり突出している。

その王安石の「妹」詩群のなかで最も目を引くのは長妹・文淑の存在、更には彼女との応酬詩である。次に挙げる「張氏女弟の雪を詠むに次韻す（次韻張氏女弟詠雪）」（巻31）は制作年は未詳だが、詩中に「都城」の語があることから、王安石が京師にいたころ、おそらく彼が宰相の地位にあった熙寧年間の作ではないかと思われる¹⁴。

天上空多地上稀	天上 空しく多く 地上は稀なり
初寒風力故應微	初寒の風力 故に応に微なるべし
那能鎮壓黃塵起	那んぞ能く黄塵の起つを鎮圧し
強欲侵凌白日飛	強いて白日を侵凌して飛ばんと欲せんや
呂犬橫來矜意氣	呂犬 ^{ほしいまま} 横に來りて意氣を ^{ほこ} 矜り
窟蟾偷出助光輝	窟蟾 ^{ひそ} 偷かに出でて光輝を助く
都城只有袁安憊	都城 只だ袁安の憊有るのみ
我亦年年幸賜衣	我亦た年年 幸いにして衣を賜る

第一句「天上 空しく多く 地上は稀なり」（空中をはらはらと舞うばかりで地上には積もらない）は謎かけめいて、雪を詠う表現としてはやや奇妙だが、唐・白居易が落花をいつた「枝上は稀疎にして地上多し（枝上稀疎地上多）」（「惜落花贈崔二十四」、『全唐詩』巻439）をそのまま逆さにしてみせたもの。軽口めいたユーモアに二人の関係の気安さが窺われ、同時に何か寓意の存在を感じさせる。続く第二句はこれを受けて、（降りしきる雪が積もるまでに至らないのは）「風がまだ厳しくないからだ」という。この部分、李壁注は『詩経』邶風「北風」の「北風は其れ涼く、雪を雨らして其れ雱じ」（北の風はつめたく、雪はどンドンふる）、また韓愈の「雪を詠む 張籍に贈る（詠雪贈張籍）」（『全唐詩』巻343）から「留まるを助けて風は党と作る」（雪を降らせる風が客人を留める助けとなってくれる）を引いている。

第三・四句目は首聯を受けて、その雪が「黄塵を鎮圧」したり「白日を侵凌」したりするようなすさまじいものではない、心配には及ばないと続く。「黄塵」は土埃のこと、ここでは京師の路に起つ土埃、転じて車馬の往来、交通のことを指すのであろう。李壁は『南史』巻10「陳本紀」に記される「梁末の童謡」の一節、「憐れむ可し、巴の馬子。見えず 馬上の郎、但だ見る黄塵起つを」を引く。「鎮圧」はここでは塵を「上から抑える」、「塵の上に重なる」、また「侵凌」は太陽を「さえぎる」というほどの意で用いているのだろうが、「鎮圧」には力で押さえつける、また「侵凌」には侵犯するの意があり、武張った文字

面に唐突さを覚える。ここは王安石が、文淑の原唱にあった語句を「そのようなことがあるはずもない」という反語のかたちで返したのではないだろうか。李壁はここでも先の「詠雪贈張籍」から「日輪埋まりて側かんと欲し、坤軸 圧して將に頽れんとす」、また「射訓狐」(『全唐詩』巻340)から「意 義和の鳥に唐突せんと欲す」を引いている。「雪」というモチーフは、先に触れた「詠絮の才」の逸話や、南朝・宋・謝恵連の「雪賦」(『文選』巻13)に代表されるように、雪を花や柳のわた毛に見立て、典雅で美しい景物として描かれてきた。これに対し、韓愈の作はあえて雪の醜悪な側面を描いて新しい局面を拓いたものとされ、またそこには何らかの政治的寓意がこめられていると理解されている。降り積もる雪を「太陽の車輪を傾け、大地を支える柱を砕く」禍々しいものとして描くこと。また凶鳥とされるフクロウ(「訓狐」)が「義和の鳥」(太陽)に抵触し、その運行を止めようとするとの句には、確かに政治的な寓意を読み取ることができるだろう¹⁵。そして、李壁もまたこの二句にそのような含みを、妹の憂慮として読み取っているのではないだろうか。

第五・六句は雪をいうのに「犬」[蟾]という動物の対を用いた表現。「邑犬」は『楚辞』九章「懷沙」に「邑犬の群がり吠ゆるは、怪しむところを吠ゆるなり」とみえ、また「雪に吠える犬」は唐・柳宗元が「かつて『蜀の犬が太陽に向かって吠える』という話を聞いて嘘だろうと思っていたが、越を旅したとき大雪に会い、犬たちが吠えて走りまわるのをみてそれが本当のことだと知った」と述べたという話柄(「答韋中立論師道書」、『全唐文』巻575)にもとづく。曇りの多い蜀の犬は太陽が出ると驚いて吠えるが、南国の越では犬たちは雪に驚いて吠え立てるというのである。「窟蟾」は「月窟」(月のこと)に住むといわれるヒキガエル、転じて月を指すことば。犬たちが「横に来たりて意気を衿る」(好き勝手に出てきて盛んに吠え立てる)、月が「儉かに出でて光輝を助く」(こっそり出てきて雪の輝きに加勢する)は、ユーモラスではあるが、同時にやはり何らかの寓意が感じられるものである。

第七句は、後漢の袁安が、洛陽に大雪が降った朝、門を閉ざして寝ていた理由を問われ「大雪でみな飢えている、自分まで施しを干めるべきでない」と門を閉ざしていたのだ(大雪人皆餓、不宜干人)と答えた逸話にもとづく。ここで「袁安の儻」というのは、即ち積雪のこと。或いは大雪によって京師に食糧不足が起こることをいうのだろう。文淑の原唱は伝わらないが、彼女は「雪を詠む」に言寄せて兄の身を憂慮する詩を書いて寄越したのではないだろうか。それはもしかしたら単に健康を気遣ったものかも知れないが、降りしきるだけで積らない雪、ささやかな雪に驚いて吠え立てる犬たち、また白日を「侵凌」するといった表現には、妹の憂慮が兄の政治的社会的立場についてのものではと思わせるものがある。これに対して詩の結びは、愁うべきことはあくまでも雪のことだけで、自分は元気にやっている。なんなら袁安のように、のんびり寝てさえいる。天子から賜った暖かな——あるいは雪のように真っ白な——衣もあるのだし、心配するには及ばない、といったものであろう。

最後に、同じく文淑の詩に王安石が唱和した作品「長安君の『鍾山の望』に同ず(同長安君鍾山望)」(巻31)をみてみよう。長安君は文淑のこと。「鍾山」は江寧(現在の南京)郊外にあり、蔣山または北山ともいう。王安石は父母をここに葬り、晩年隠棲して市街とのちょうど真ん中に住まいを構え、多くの詩篇を残している。よく知られた「船を瓜洲に泊す(船泊瓜洲)」(巻43)は晩年の作ではないが、そこにも「京口 瓜洲一水の間、鍾山 祇だ隔つ数重の山。春風自ずから江南の岸を緑にす、明月 何れの時か我が還るを照らさん」とあるように、王安石にとっては自らが還るべき場所の象徴のような存在であった。制作年は未詳だが、おそらく晩年、江寧隠棲後の作品。妹は離れた場所から懐かしい鍾山の眺めを詩に詠んできたのだろう。

解装相值得留連 装を解いて相い値い 留連を得
一望江南萬里天 江南 万里の天を一望す

「惟有愛詩心未已、東歸與續棣華篇」

残雪離披山韞玉	残雪 離披として 山 玉を韞 ^つ み
新陽杳靄草含煙	新陽 杳靄として 草 煙を含む
餘生不足償多病	余生 多病に償 ^{むく} ゆるに足らず
樂事應須委少年	樂事 応に須らく少年に委ぬるべし
惟有愛詩心未已	惟だ詩を愛して心未だ已まざる有り
東歸與續棣華篇	東歸して与に棣華の篇を続 ^つ がん

冒頭の第一句は、旅から戻り鍾山のすがたを視界に収めて、そこではじめて足を留めて江南の風景を心行くまで眺めることができる、というもの。鍾山のある此の地こそが自分が「留連」すべき、留まるべき場所であるとの意味を含むのであろう。「相値」は南朝・梁・江淹「知己賦序」(『全梁文』巻33)に「始め北府に於いて相い値いしより、蓋を傾けて已む無し」(はじめて南京で出会ってからというもの、古くからの友人のように話が尽きなかった)とあるように人との出会いに用いる語だが、ここで詩人が「出会う」のは鍾山である。王安石詩では他に「烏石岡頭 躑躅紅なり、東江の柳色 春風に漲る。物華と人意 曾ち相い値い、永日 留連す 草莽の中(烏石岡頭躑躅紅、東江柳色漲春風。物華人意曾相値、永日留連草莽中)」(『雜詠六首』其四、巻46)などにもみられ、「物華」と「人意」がびたりと一つに出会う場所、そこに一日中留まっていたと詠われる。「烏石岡」は王安石の母・呉氏の実家があったところ。やはり王安石が憧憬をこめてしばしば描く場所であった。「得」の文字について、清水茂氏は、王安石の「北山」(巻42)「細數落花因坐久、緩尋芳草得歸遲」の語注に「『得』は『帰遅』が獲得できた、望ましいことをしとげたという気持ち」と注釈を付している¹⁶。この「留連を得」も同様である。

第三・四句はその鍾山を光と気の融合する存在として描く。「山 玉を韞む」は晋・陸機「文賦」(『文選』巻17)「石は玉を韞んで山輝き、水は珠を懐いて川媚し(石韞玉而山輝、水懷珠而川媚)」(石のなかに宝玉がかくれているれば山全体が輝きを放ち、水底に真珠が潜んでいれば川はおのずと光彩を発する)¹⁷を踏まえる表現。「草 煙を含む」は萌え出す春の草がたなびく気のように一つになり、遠くみどりにけぶってみえることをいう。唐・韋応物に「煙芳 何処にか尋ねん、杳靄たる春山の曲(煙芳何處尋、杳靄春山曲)」(『全唐詩』巻192)とある。早春の気味のなかに起ち上る景物の輝きに触れ、一転、自らの老いに思いを致すのが後半である。穏やかな晩年も、失われた若き日を埋め合わせてくれるものではない。ただ一つ、詩人に残されているのは、已むことのない詩への思いだけ。結びの一句、「棣華篇」とは『詩経』小雅にみえる詩篇「常棣」を指す。「棣華」は春に白い花をつける「常棣の花」¹⁸のこと。その花びらが一つののなかに相い依りながら咲くことを、兄弟が苦楽を共にして榮えることに例え「常棣の華、鄂不 韡韡たり。凡そ今の人、兄弟に如くは莫し」とうたうことから、兄弟を指すことばとして用いられる。結びは、鍾山のもとに帰ってきて兄妹ともに仲睦まじく詩を詠みかわそう、の意であろう。王安石は「文淑の湓浦より寄せらるるに和す(和文淑湓浦見寄)」(巻31)の結びにも「惟だ詩のみ我が与に愁病を寛む、爾に報いるに何ぞ妨げん棣華を賦すを(惟詩與我寛愁病、報爾何妨賦棣華)」(そなたの詩だけが私の愁いをやわらげ慰めてくれる、お返しに兄としてこの詩を捧げよう)と類似の表現がみられる。この妹の存在が、詩人にとって決して小さなものでなかったことを表すことばであろう。

文淑は、王安石の五歳年下で、同腹の兄弟たちのなかで最も年の近い存在であった。王安石が彼女のために記した墓誌銘によると、彼女は十四歳で父の上司の息子に嫁ぎ、五十一で夫を亡くし、五十六歳のとき、息子の任地で没した。彼女について王安石は「婦為れば婦とし、妻為れば妻とし、母為れば母とし、姑為れば姑として、皆な歎歎すべく、能く問毀すること莫し。詩を工にし書を善くし、強記博聞、明弁敏達、人に過る者有り。……晩に佛書を好み、亦た信に之を踐う」と記している。文学芸術に優れた才能を

持ちながらも、嫁として妻として、また母・姑として生きた彼女は、きわめて規範的な士大夫の「家の中の女」であった。一方で彼女の詩才は当時それなりに世に知られるものでもあったらしいことが、北宋・魏泰の詩話¹⁹にみえる。

『隠居詩話』に云う。近世の婦人、多く詩を能くし、往往にして古人に^{いた}臻る者有り。王荊公の家、詩を能くする者最も衆し。張奎の妻、長安県君、荊公の妹なり。佳句の最^{さいた}為るは「草草たる杯盤 笑語に供し、昏昏たる燈火 平生を^{かた}語る」²⁰なり。

魏泰は、王安石の妻、娘、姪など王家の女性たちの多くが詩にすぐれ、その詩句が「脱灑可喜」（すつきりとして好ましい）ものであると羅列するが、その筆頭に挙げるのが文淑である。王安石の「妹」詩群のうち、四首が文淑の詩に王安石が唱和したものであるが、反対に文淑が兄の詩に応えた可能性も合わせれば、兄妹間の唱和、引いては文淑自身の詩作がある程度活発なものであったことが十分に窺えよう。

北宋の文学を主導した欧陽脩には、友人・謝伯初（字・景山）の妹・謝希孟の詩集に寄せた序文「謝氏詩序」（『居士集』巻42）がある²¹。そこには、兄と同じく教養豊かな母の薫陶を受けた妹の詩が、「家の中」の女子故に世に出ないことを嘆くことばが綴られている。

希孟の言 尤も隱約深厚にして、礼を守りて自ら放^{はな}にせず、古えの幽閑淑女の風有りて、特だ婦人の言を能くする者のみに非ず。然るに景山嘗て今世の賢豪たる者に従^{したが}って遊び、故に当時に聞こゆるを得たり。而して希孟 不幸にして女子為りて、自ら世に章^あ頭すること莫^なし……今 傑然たる巨人の能く時人を軽重して信を後世に取る者有らば、一たび希孟の為にこれを重んじ、其れ泯没せざらしめよ。予は固より力の足らざる者、復た何をか為さんや、復た何をか為さんや。

また先に挙げた黄庭堅は、母方のおば（母の姉妹、文成君）について『春秋』を治めること甚だ文にして、士大夫の如き権智有り」と評し、またもう一人のおば（崇徳君）についても、その学術には古人の風格があり、芸術的才能や、仏教への造詣の深さは男子も及ばないとほとんど手放しに称賛している²²。これらのことばをすべて額面通りに受け取ることはできないとしても、王安石が文淑を認めていたのと同様、欧陽脩・黄庭堅といった時代を代表する士大夫たちが「家の中の女」たちの才をかなり積極的に認めていたことの意味は小さくないように思う。唐代の女性詩人は、数も少なく、またそのほとんどが妓女などのいわば「家の外の女」たちであったのに対し、南宋・朱熹が「本朝の婦人、文を能くするは只だ李易安と魏夫人有るのみ」（『朱子語類』巻140）と評した李清照や魏夫人（前出・魏泰の姉にあたる）、また朱淑真ら北宋から南宋にかけての女性詩人たちは、士大夫の家の中で生まれ育った女性であった²³。文淑もまた、作品こそ伝わらないものの、こうした流れのなかにあった女性たちの一人であったのであり、彼女の存在は、妹としてのみならず、身近に文学を語る仲間として、王安石の詩人としての営為の中に一定の位置を占めていたのではないだろうか。

杜甫が妹の寄る辺なき身に先の見えない自らの境遇を重ねて詠ったように、王安石もまた妹たちに寄せた詩のなかで、妹たちへの思いと、自らの人生の漂泊感を重ねていたのではないかと思う。「安んぞ知らん十年来、乖隔するは願始に非ず。相い逢えば輒ち遠きを念い、悲吒喜びより多し」、「天低れて浮雲は深し、更に覚ゆ向かうところの高きを」、「我 二水の間を行き、日として爾を思わざる無し」などのことばがそれである。他家に嫁いで父母のもとを離れ、嫁して後は夫の官遊に従い、また、文淑が長子の官舎で没したように夫の死後は子の官遊に従う。「懐うこと善き」女子の漂泊は、自身も官遊と絶え間ない浮沈のなかにある士大夫としてのそれと重なる。王安石と黄庭堅はともに比較的早く父を亡くしており、彼らが妹に寄せる感情には父性的なものも含まれていたと思うが、その漂泊への共感、まさにいまこの時、

同じ運命を生きる「同生」の妹であればこそであろう。王安石がこれほど多くの詩を既婚の妹に寄せていることは一つの驚きだが、そこには先に挙げた王維の詩や柳宗元の祭文にみえるような、妹（姉）たちの個別的具体的エピソードは欠けており、その意味ではやや定型化したものでもあり、そこに自ずと題材としての限界があったようにも思う。一方、文淑に寄せた「惟だ詩を愛して心未だ已まざる有り」、^こ「惟だ詩のみ我が与に愁病を寛めん」などのきわめて率直なことばからは、詩人が「肉親との離別の悲しみ」という普遍的な、或いはある意味ありきたりなモチーフを借りて、ある種の弱音を妹に漏らしているかにもみえる。「東歸して与に棣華の篇を続がん」は、そうした限界のなかでのぎりぎりの心情表白であったのかも知れない。かつて左思は妹に贈った詩のなかで「伊れ 我の闇、^あ睇くるは妹の曜^{かがやき}」と述べたが、王安石にとって、心やすく、また聡明な妹との詩のやりとりは文字通り心を照らす大きな慰めとなっただろう。

王安石は次妹の夫たる朱明之と多く唱和し、また江寧では末妹の夫・沈季長と頻繁に連れだっていたことが残された詩からわかる。二人の婚姻は父・王益の死後のことであり、おそらくその婚姻の後ろ盾となったのは王安石自身であったと推察される。妹とのやりとりの多さは、その夫たちとの関係が詩人にとって大切なものであったこととも関わりがあろう。王安石の文学的な営みにこれらがどのように関わっていたかについては、今後の課題としていきたい。

注

- 1) 本論文中の王安石詩のテキストは南宋・李壁箋注・高克勤点校『王荊文公詩箋注』（上海古籍出版社、2010）を用いた（以下『李壁注』と表記、本文中の王安石詩巻数はすべてこれによる）。また補足資料として李之亮補箋『王荊文公詩注補箋』（巴蜀書社 2002）を参照した。王安石の作品中、詩題に妹の名がみえるものは本論中に引くものを除き以下の通り。「已未耿天驥著作自烏江來予逆沈氏妹于白鷺洲遇雪作此詩寄天驥」（『李壁注』巻1）、「遊賞心亭寄虔州女弟」（巻24）、「示長安君」（巻30）、「示四妹」「寄張氏女弟」（巻34）、「寄張劔州並示女弟」（巻35）、「和文淑」（巻47）。
- 2) 王安石作品の繫年は劉成国『王安石年譜長編』（全6冊、中華書局、2018）を参照した。また王安石の三人の妹及びその夫の来歴等については前掲・湯江浩『北宋臨川王氏家族及文学考論 以王安石为中心』上篇・第三章「王安石諸妹、妹婿之生平及其与王安石之文学往来」に極めて詳細な研究があり、本論を書くにあたって多大な恩恵を蒙った。先行論文としては他に張明華「王安石家族女性文化初探」（『鄭州航空工業管理学院学報（社会科学版）』、2004.02）などがある。
- 3) 福永光司『莊子 内篇』（中国古典選13 朝日新聞社 1978）参照。
- 4) 『李壁注』は「舒」の文字を欠くが『臨川先生文集』により補った。
- 5) 「王令」十九に所収。朱明之の王安石との応酬詩は同じく王安石と親しく交際した北宋・王令の集に誤って編入されたものと思われる（前掲・湯江浩氏の指摘による）。
- 6) 本論文中の『文選』の訓読などは川合康三・富永一登・釜谷武志・和田英信・浅見洋二・緑川英樹訳注『文選』（全6冊、岩波書店 2019）を参照した。
- 7) 本論文中の『詩経』の訓読・解釈などは吉川幸次郎注『詩経国風』巻上・下（中国詩人選集1・2 岩波書店 1958）及び高田眞治『詩経』巻上・巻下（漢詩大系1・2 集英社 1968）を参照。
- 8) 左思・鮑照両兄妹については輿膳宏「左思と詠史詩」（『中國文學報』1966）、及び荒井健・輿膳宏『文学論集』（中国文明選第13巻 朝日新聞社 1972）、輿膳宏編『六朝詩人傳』（大修館書店 2000）を参照。
- 9) 「登大雷岸與妹書」のテキスト、制作年及びその状況・解釈については丁福林・叢玲校注『鮑照集校注』第二冊（中華書局 2012）を、また訓読については佐藤大志「鮑照『登大雷岸與妹書』訳注」（中國文學研究會『中國學論集』vol.20 1998）を参照した。
- 10) 「郎伯」を夫とする注釈もあるが、ここでは蔣寅「“郎伯”辨——兼考杜詩『元日寄韋氏妹』本事」（『文史知識』

- 2016)の論考をもとに理解した。訓読など下定雅弘・松原朗編『杜甫全詩訳注』第1冊(講談社 2016)参照。
- 11) 小見清潭訳注『王右丞集』(国訳漢文大成巻8所収 国民文庫刊行会 1940)参照。
 - 12) 黄宝華『黄庭堅評伝』(南京大学出版社 1998)参照。
 - 13) 中原健二「詩人と妻——中唐士大夫意識の一断面」(『中國文學報』1993)、同「夫と妻のあいだ——宋代文人の場合」(荒井健編『中華文人の生活』所収、平凡社、1994)及び野村鮎子「士大夫が語る家の中の女たち——ジェンダーの視点からの古典研究の試み」(関西中国女性史研究会編『ジェンダーからみた中国の家と女』所収 東方書店 2004)参照。
 - 14) 湯江浩氏は「おそらく早期の作品」と述べる。前掲書p197。
 - 15) 川合康三・緑川英樹・好川聡編『韓愈詩訳注』第1冊(研文出版 2015)参照。
 - 16) 清水茂注『王安石』(中国詩人選集二集4 岩波書店 1962)。
 - 17) 『弘法大師空海全集』第5巻(筑摩書房 1986)所収の興膳宏訳注『文鏡秘府論』を参照。
 - 18) 前掲・漢詩大系『詩経』では「庭桜の花」とする。
 - 19) 南宋・胡仔『苕溪漁隱叢話』前集60「麗人雜記」所収。
 - 20) この二句は王安石自身が文淑に宛てた「示長安君」にみえる。単なる誤記か、あるいは文淑の用いた詩句を王安石が借用して詩に織り込んだ可能性もある(湯江浩氏の指摘、前掲書p196)。
 - 21) 洪本健校箋『歐陽脩詩文集校箋』巻中(上海古籍出版社 2009)及び邱瑰華「從『謝氏詩序』看歐陽脩的女性詩学思想」(『淮北師範大学学报(哲学社会科学版)』2014)参照。
 - 22) 「毀壁序」(『山谷集』別集巻3)、「姨母李夫人墨竹二首」(『山谷集』巻5)及び「觀崇德墨竹歌 并序」(同外集巻11)。
 - 23) 内山精也「転回する南宋文学——宋代文学は「近世」文学か?——」(名古屋大學中國文學研究室『名古屋大学中国語学文学論文集』2013)。